1
プラトンは、「知性は、<まさに生きものであるところのもの>のなかにイデアが含まれているのを見る」と述べ、

さらにことばをつづけて、「(万有の)制作者は、この万有も、知性が<まさに生きものであるところのもの>のなかに見るものを持つべきであると考えた」と述べている(『ティマイオス』39e7)

そこで、まず、あのものが

すると、プラトンは、「知性以前に、すでに諸々の形相があって、知性はすでに存在している不動なる形相を直知するのである」と言っているのではないだろうか

知性ではなくて、知性とは異なったものであるのかどうかを調べてみなければならない

——私は、真なる生きもののことを言っているのであるが——

というのも、真なる生きものを観るのが知性であるからである

とすると、われわれは、「その真なる生きものそれ自体は知性ではなくて、知性によって直知されるものにほかならないのである」と言わなければならないことになるであろうし、

また「知性は自分の観るものを、自分の内に持っているのである」とも言わなければならなくなるであろう

したがって、もし真実在がかんにこあるのであれば、知性の持つものは真実在の影であって、真実在ではないことになるであろう

いや、<直知するものとしての知性>と<直知されるものとしての真なる生きもの>が異なっているとしても、両者はただ異なっているとしても、両者はただ異なっているというだけで、たがいに離れているわけではないのである

というのも、プラトンのことによれば、「それぞれのものがそれ自体で存在している<あの>オン(有)の世界に、真実在もある」からである

それに、一方は<直知するものっで、他方は<直知されるもの>であるという、ただそれだけのちがいであれば、思惟のうえでは区別されても、実際には両者は一つであると言っても何ら支障はないのである

なぜなら、プラトンは、「知性の観るものは、知性とはまったく異なったもののなかにあるのではない、知性は自分自身のなかに直知の対象を持っているのである(『ティマイオス』47c)」と述べているからである

すなわち、直知されるものがまた知性であるとしても、何ら支障はないのであるが、そのばあいの知性が不動かつ統一かとれていて、静止の状態にあるのに対して、

自己自身に内在するあの知性を観る知性というものは、あの知性に起因する或る種の活動、つまりあの知性を観る活動なのである

そしてその活動としての知性は、あの知性を観るのであるから、いわばあの知性を対象とする知性なのである

なぜなら、それはあの知性を直知する知性であるからである

だが、あの知性を直知する知性は、それ自体がまた直知する知性であるとともに、あの知性を模倣しているのであるから、別の意味では直知される知性でもあるのであってはならないのである

それゆえ、かしこで観た生きものの四つの種族をこの感性界に作ろうと考えたものは、これけてなぬも(直知する知性)なのである

しかしながらプラトンは、暗黙のうちにこの<考えるもの>をあのこっつのものとは別ものとしているように思われるのである

だが、他の者たちには、それら三つのものが、すなわち<真なる生きもの>と<知性>と<考えるもの>が一つであるように思われるであろう

すなわち、他のばあいにもしばしば見られることであるが、前提が異なるから、三つのありかに対する考える異なってくるのである

しかし、はじめの二つについてはすでに述べられたのであるけれども、三番目のmのは、すなわち、<真なる生きものの中に内在していて知性に見られるものを自分の手で産出した作ったり、部分に分けたりしようと考えたものは、何なのであろうか

或る意味では、知性がその分割者たりうるが、別の意味では知性は分割者たりえないのである

——それらは魂なのであるが——

つまり、<部分に分けられたものど>は知性に由来するのであるから、その限りでは、知性自身が分割者であることになるが、<部分に分けられたものども>は

知性に由来するものではあるけれども、知性其れ自身は<部分にわけられたものども>とはてどと言っているのだから、その限りでは、多くの点に分割したのは魂であることになるのである

だからこそプラトンも、「分割は第三のもののすることであり、第三のものの種内に属することである。なぜなら、その第三のものが考えたからである、つまりそれ、すなわち思考は、知性の働きではなく分割されたものの<なかにあって>分割された活動を営む魂の働きなのである」と述べているのである

2
つまり、全体としてーつの学問知識は、個別的な命題に分割されても、分散したり眠切れに成ったりすることはなく、それぞれの命題が雑勝的に(自己自身のうちに)全体(としての学問知識)を持っていて、同じものがそれの原理となり目的となっているのであるが、

これと同じように、人は自分自身を整えて、自分自身のなかにある原理がまた目的でもあるようにし、自分自身のすべてが全体として自然本来の最善のあり方に立ちもどるようにしなければならない

自然本来の最善のあり方を自分のものとする時には、自己自身の持つその最善なるものにふって、あの知性界の最善なるものに触れることになるであろう

すなわち、彼が最善のあり方を自分のものとする時には、自己自身の持つその最善なるものにふって、あの知性界の最善なるものに触れることになるであろう

3
全霊は、どこにも生じたことはないし、またやってきたこともない。

全霊の占めるべき場は、どこにもなかったからである

いや、むしろ、物体が全霊のそばにきて、それを分取したのである

だからプラトンもティマイオス」の述る個所で、「魂が物体のなかにはと言わずに、「物体が魂のなかへ(置かれた)」と言っているのである

これに対して、他の諸霊は自分たちがそこからやってきたところを持ち

——なぜなら、それらの魂は(全)霊からやってきたのであるから——

そこへと向かうところを、すなわち陽切て行ってきまよへきところを持っているのである

したがって、また、昇って行くべきところも持っているのである

しかし、全霊のほうは常に上方の世界にあり、そこにあるのが全霊の魂の本位なのである

そして、その次にあるのが宇宙(万有)であって、それはいわば太陽の近くにある世界であり、太陽の下にある世界である

さて、部分霊は自分の前にあるものに向かうことによって照らされ

——なぜなら(有るもの)と出会うからである——

自分の後にあるものをのぞむことによって(有らぬもの)へ向かうのである、だが、部分霊は自己自身に向かう時に、このようなことを行うのである

なぜなら、部分霊は自己自身に向かおうとして、いわば空虚に足を踏み入れ、より無規則的なものとなって、自分の後ろにある自分の影としての「有らぬもの」を作るからである

これに対して、中間にある魂は、そこに位置を占めている限り、自分の固有な場所にいるのであるが、いわば第二の直視でもって、ふたたびその影を眺め、それに形を与え、言んでそれに向かうのである

そしてこれの影は無規定的なものであって、まったくの暗闇なのである

なぜなら、それはあらゆる点でロゴスを欠き知性を欠いているのであって、「有るもの」から(はる)か遠くに離れているからである

4
それでは、どのようにして一から多が生ずるのであろうか

ーはいたるところにあるからである。つまり、一のないところはないのである

それゆえ、ーはすべてに満たしているのである

いや、むしろ、ーはすでにすべてなのである

したがって、ーは多であることになる

だが、ーそれ自体はまたどこにもその居場所を持っていないのであるから、万有は一それ自体のゆえにまずるのである

すなわち、もしーそれ自体が単独でいたとしたところにあったのであれば、ーはそれ自体で万有であったであろう

では、なぜーそれ自体は、いたるところにあるのみならず、そのうえさらにまた、どこにもないのであるのだろうか

なぜなら、ーそれ自体は、どこにもないからである

ーはすべてに先立ってあるのでなければならないからである

それゆえ、ーそれ自体は万有を満たし、万有を作るのではなくて、万有の作る万有であってはならないのである

5
魂それ自体は、視覚のようなものではなければならない

それゆえ、魂は知性との関係では素材である

そして魂の見る対象は、知性でなければならず、魂は知性を見るまでは無規定なものであるが、もっとも知性を直知するように生まれついているのでなければならない

6
われわれは、自己自身を直知していることによって、明らかに直知しているものを観ているのである

もしそうでなければ、われわれは「直知している」ということを偽って用いていることになるであろう

それゆえ、もしわれわれが直知し、しかも、自己自身を直知するのであれば、その時のわれわれは、直知しているものを直知することになるのである

真の直知であれば、そこには「直知する自分」と「直知される自分」があることになる、すなわち、「直知する知性」より先に「直知される知性」があることになり、直知される知性は静止していることになる

してみると、この直知作用より先に、別の、いわば静かなる直知作用があることになる

それに「有」の直知作用や(生命)の直知作用もあるのである

したがって、この生命や有の先に、別の有と生命があることになるであろう

してみると、それら全観たのは、活動している知性)であるところのものであることになる

しかし、このようにして自己自身を直知している活動が知性であれば、真のわれわれは、知性によってのみとらえられるものであることになる

そして、知性の直知作用が(対象の)似像をもたらすことになるのである

7
第一位のものは、動と静を産出することの可能なカである

これに対して第二位のものは表一位のもののそのぐって静止し、かつ動いているのである

なぜなら、知性とその直知対象は別であり、知性はその別のものに対して直知作用を行うのであるが、ーーーは直知作用を行わないからである

つまり、直知作用を行うのは、たとえ自己自身を直知するのであっても、二重性のあるものなのであり、

自己自身の存在そのものに善さがあるのではなくて、直知作用を行うことにおいて善さを得るのであるから、欠けたところのあるものなのである

したがって、それは動と静のカなたに超越しているのである

そして知性は、第二位ものの領域にあるのである

8
すべて可能性としてのカから現実の活動へと移行するものにとっては、それの現実態は、<それがある限りは、常に同じものとしてあるところのもの>なのである

したがって、たとえば火のような諸物体にも、それの完成はあるのであるが、しかし、諸物体は素材を伴っているのであるから、「常にあること」は不可能なのである

これに対して、合成されていないもので現実態においてあるものは、常にあるのである

だが、同じものが現実態においてありながら、別の面で可能態にあることは可能なのである

9
しかし、第一位のものは、真実在のかなたに超越しているものであって、直知作用を授じることはない

これに対して、知性は真実在であり、動や静も知性界にあるのである

つまり、第一位のものそれ自体はいかなるものにもかかわりをもたず、それは外のものがそのまわりで憩いながら静止したり、動いたりしているのである

なぜなら、動といものは欲求なのであるが、第一位のものは、いかなるものにに対しても、欲求を持つことはないからである

というのも、最高の地位にあるものが何を欲求するのであろうか

では、第一位のものは、自己自身さえも直知することはないのであろうか

自己自身を持っている限り、当然、「(自己を)直知する」と言われるのではなかろうか

(知性が)「直知する」と言われるのは、自己自身を持っているからではなくて、第一位のものを観るからなのである

そして、この直知作用は、それ自体がまた第一義的な活動であるのである

それで、もしそれが第一義的な活動であるとすると、それは前には、いかなる活動もありえないことになる

だから、その第一義的な活動を提供するものは、その活動のかなたに超越しているものであることになる

なぜなら、直知作用も第一義的な意味で尊いものであるわけではないからである

したがって、直知作用は、あの第一位のものにつづく第二位のものであることになる

事実、直知作用であればどれもみな尊いわけではなくて、善なるものに対するそれが尊いのである

してみると、善なるものは、直知作用のかなたに超越していることになるであろう

しかし、(そうだとすると)善なるものには、自己自身に対する意識がないことになってしまだろう

善なるものがすでに<善きもの>とってあるから、当然、それの自己意識もなければならないのであろうか、どうなのであろうか

では、(善なるものにとって)自己意識とは、何なのであろうか

他方、意識がそれを善きものとするのであれば、善なるものは、その意識よりも先にはないことになるであろう

もし善きものとしてすでにあるから(自己意識もある)のであれば、善なるものは、すでにその意識よりも先にあることになるであろう

したがって、その意識それ自体もないことになるであろう

それは善なるものの意識だからである

第一位のものには、「生きる」ということばを使ってはならない、もしそのことばを使うとすれば、それは、「他のものに生を与える」という意味においてのみである

では、どであろうか、第一位のものは、生きてさえもいないのであろうか

自己意識を持つものや自己自身を直知するものは、第二位のものである

なぜなら、それは、この意識の活動によって自己自身を理解するために、自己意識を持つのであるから

だから、もしそれが(意識を持つことによって)自己自身を理解するのであれば、それは自己自身を知っていなかったのではなければならず、その点において欠けたところのあるものでなければならないのであって、

してみると、第一位のもののからは、理解する働きを除去しなければならないことになる。

それで、直知作用によって完全なものとされなければならないことになるのである

なぜなら、それを付け加えることは、(それを)取り去ることであり、(それにおいて)欠けているものとすることになるからである

予めすべてをしっていることになるので、知性が生ずることも知る必要がないことになる